平成１６年１２月１日発行

かまぼこ

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会
第１４号

わがまちの顔

ヴィオラ奏者　リチャード・勝・エレジーノさん

六月二十五日「室内楽の夕べ」が大田パシフィックチェンバープレイヤーズ主催でアプリコにおいて演奏会が開催されました。

今回は、ヴィオラ奏者のリチャード・勝・エレジーノ氏（日本名／冨永　勝）に、お話を伺いました。

氏は、大田区西蒲田生まれ、相生小学校・御園中学校を卒業後、一九七二年に家族と共に音楽活動のため渡米。現在、ロス・アンゼルス交響楽団でヴィオラ奏者として活躍中です。

五歳より故穂積美和子女史にヴァイオリンの手ほどきを受け、後に故福元豊氏に師事。十四歳にて故浅妻文樹氏の教えの下、ヴィオラへ転向されたとの事です。

ご家族は、奥様と五歳・三歳のお子様と共にロス・アンゼルス郊外に住み、日本には十二月と六月に帰国されています。

ロスでは仕事、日本ではボランティア活動を中心に力を注いでおられます。二〇〇三年に大田パシフィックチェンバープレイヤーズを立ち上げ、大田区内の小・中学校や養護学校・病院等でボランティアの演奏会を開催しています。

氏は、音楽を通し子供たちのいじめをなくし、思いやりの心を持ってもらいたいとの思いからボランティア活動を始められたとの事です。

大田区教育委員会の依頼により「親子でクラシック」と題して、区内の小・中学生の親子を対象に、アプリコホールでコンサートを開催し、毎回盛況で抽選にもれた生徒さんもいらっしゃいます。

大田パシフィックチェンバープレイヤーズは、リチャード氏を中心に交響楽団に所属又は、フリーでプロとして活躍しているメンバーで構成されています。

皆さんは、氏のボランティアに対する熱意に賛同してくれる方ばかりだそうです。

取材中、同期生を中心に演奏会の企画・運営をしている仲間やスタッフに対して、感謝の言葉を何度も口にされていたリチャード氏の姿が印象的で、聞いている人がさわやかな気持ちになり、心が和む演奏会を今後も続けて行きたいと語ってくれました。

今後も素敵な音楽を私共に聴かせてください。

取材（高橋・伊藤・川名委員）

シリーズ「蒲田と文学」その3

砂の器

松本清張

小説「砂の器」

《国電蒲田駅近くの横丁だった。間口の狭いトリスバーが一軒、窓に灯りを映していた。十一時過ぎの蒲田駅界隈は、普通の商店がほとんど戸を入れ、スズラン灯の灯（あか）りだけが残っている。これから少し先に行くと、食べ物屋の多い横丁になって、小さなバーが軒を並べているが、そのバーだけはぽつんと、そこから離れていた。》

砂の器　第一章トリスバーの客より

そのバーというのは、事件の起こる前夜に被害者と犯人らしい男が、会話していたというバーなのです。

このあと場面は、蒲田駅操車場に移ります。蒲田駅発京浜東北線の始発は四時八分。電車を動かすためには、運転手と検車係とが、三時過ぎには宿直室から操車場に向います。構内には出発を待つ多数の連結車両が置いてあり、五月十二日の午前三時は、日の出まではまだ時間があり、暗くて寒い深夜といえる時刻でした。車検係の若い男は、七輌目の車輪に懐中電灯の光をあてて、棒立ちになりました。線路上に横たわる死体を発見したのです。捜査にあたった蒲田警察署の刑事は、その前夜にバーで「カメダは今も相変わらずでしょうね。」という犯人らしい男と東北訛りのある被害者との会話から、秋田県「亀田」へ急行しましたが、まったく手がかりを攫めず、捜査は行き詰りました。このままでは迷宮入りかと思われた時、被害者は、東北弁に似た訛りがある島根県奥出雲地方「亀嵩」で元巡査だった三木謙一であることが判明しました。

刑事は、地元の桐原という老人から、二十数年前の出来事を聞かされるのでした。「三木はかって亀嵩で、ひどく貧しい親子を救い、その子を育てていたことがあります。父親は重い病気に冒されていました。ある日、その子は亀嵩を飛び出して、そのまま行方不明になりました。」

三木は、亀嵩で面倒をみていたその少年が、その後、立派に成長し、今は和賀英良と名前をかえて、新進の売れっ子作曲家になっていることを偶然に旅先で知ったのです。少年への懐かしさから、とにかく逢いたい一心で急遽上京し、そして誰かに殺されてしまいました。

松本清張

この小説に描かれている主流は、虐げられた少年期から壮年期までの松本清張自身と重ね合わせて窺うことができます。氏は、明治四十二年、九州小倉で生まれました。父親峯太郎、母親タニとの間に出生しましたが、何故か入籍されず戸籍上は庶子となっていました。貧しく打ちひしがれている庶民への共感、反権力的な視点と様々な権力の暗い闇の部分への旺盛な好奇心。貧困と学歴社会の壁が、少年期の人間形成に影響をあたえたとしても不思議ではありません。

尋常高等小学校を卒業、十五歳より給仕を四年間、印刷工場で下働きをしながら版下工の修行、二十八歳で朝日新聞九州支社の広告版下を手がけ、昭和十七年、三十三歳で漸く正式に採用されました。大学卒は社員、高校卒は準社員、中学卒は雇員で給料はもちろんバッジの色までも違う差別に憤りを感じえませんでした。昭和十八年から二年間、兵役につき「ここにくれば社会的地位も貧富の差も年齢の差もまったく帳消しである。皆が同じレベルだ。」後に氏は正直に述懐しています。

昭和二十五年、週刊朝日が「百万人の小説」という懸賞小説を募集しているのを社告で知り応募。「西郷札」が三位に入選し、賞金十万円を獲得し、作家としては異例の四十二歳からのスタートをきりました。四十七歳、作家生活に本腰を入れるために退社。「点と線」「眼の壁」など空前のベストセラー作家となりました。

「砂の器」は、昭和三十五年五月から三十六年四月まで、読売新聞に掲載されました。松本清張の推理小説は、それまでのトリック偏重の推理探偵小説の在り方を大きく変えました。犯罪者の人間性を重視し、犯罪がどこかの特別な世界の出来事ではなく、現代社会の下で暮らしている私たちの中に起こりうることを作品に描き、幅広い読者の共感を得たのでした。

蒲田駅西口

終戦直後の蒲田、特に西口駅前は空襲で全て消滅し、焼野原にゴザを敷いただけの露天商や掘立て小屋の闇市から始まりました。昭和二十五年頃からは、掘立て小屋からバラック建てへと、ある程度の整理・復興はされてきましたが、未だに駅前は区画整理もなされず、道路は未舗装で、雨が降ればぬかるみに、風が吹けば土埃が舞い上る状態でした。駅前は、食料品や雑貨を扱うマーケット、個人商店、バー、小料理屋、大衆酒場などのバラックの建物がひしめきあうように軒を並べていました。

その後、幾つかの商店街通り、飲食店街などが徐々に整備され、昭和四十年代前半には、駅正面のバラック建てマーケット等も解体されて、本格的に西口復興土地整理計画が実行に移され、現在の西口広場が完成したのは、昭和六十一年でした。復興改良工事が、終了するまでに実に十数年の歳月を要しました。

「砂の器」は、小説冒頭の文章から昭和二十五年前後から昭和三十年頃にかけての蒲田西口が舞台になっていたと想像されます。

昭和２９年頃の蒲田駅西口

映画「砂の器」

岩波書店発行　日本映画の現在より

一九七四年野村芳太郎監督にて松竹で映画化された「砂の器」は、日本映画史上、犯罪捜査を扱ったミステリーとしては、興行的に最も成功した作品である。東京で起こった一つの殺人事件を発端として、刑事たちが東北から山陰まで、日本各地に犯人を追跡する旅を続ける。こうして、次第に一人の容疑者の姿が浮かんでくるが、それはかって不治の病とされて差別されていたハンセン氏病の息子である。原作では彼が幼い頃、父親と一緒に乞食をして、巡礼の旅をしていたくだりが、ちょっとだけ書かれている。脚色者の橋本忍と山田洋次は、この差別された親子の悲惨な旅の風景を拡大してクライマックスに置き、そこに観客の同情が集中するように構成した。この映画の成功は、犯人は何者かという謎解きの興味よりも、むしろ捜査の過程で浮かび上がってくる何人かの気の毒な人々への同情や共感の盛り上がり方によるところが大きい。特に、最初の被害者三木謙一は、もともと心の美しい人物であり、ハンセン氏病者に同情的に行動したことによって、逆に、そうした過去を知られたくない人物によって殺されてしまう。

主役の刑事達は、常に画面に登場し、犯人を追跡しているにもかかわらず、存在感としては希薄であり、見終わったあと観客に強く印象づけられたのは、犯人を含め、事件にかかわって死んでいった薄幸な人々の切なさ、やるせなさであった。

豪華俳優陣

この映画の出演者を紹介しておきます。ベテラン刑事役に、丹波哲郎。若手刑事は、デビューしたばかりの森田健作。犯人の作曲家役に、加藤剛。脇役陣は、左分利信、尾形拳、渥美清、笠智衆、島田陽子、春川ますみ、菅井きん、山口果林等大俳優・大女優で固め、この映画にかける製作者の意気込みを見て取ることが出来ます。

取材（柏村・滝口・伊藤・都築委員）

現在の蒲田駅西口

我が町安方北

安方北町会

藏方　庸光

当町会は、多摩堤通りから池上寄りに位置し、町会中央部には区立安方中学校、私立日体荏原高等学校の2校があり、荏原高校通り商店街を中心に東西に住宅地が広がっています。世帯数二、二五〇、人口四、五〇〇名の町会です。

戦後発足した「安方会」より南北町会に分かれ、安方北町会として独立し、お蔭様で本年創立五〇周年を迎えました。

その記念として、七月二五日「プラザ・アペア」に於いて、祝賀会を開催いたしました。

行政、近隣町会、その他各種団体の皆様にもお集まりいただき、粗宴ながらも賑やかな楽しい一時を過ごすことが出来ました。

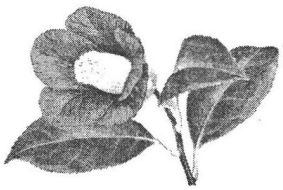
先輩会長方のご努力により、安方北町会の運営活動を通し、会員相互の信頼を構築し、良き伝統が引き継がれ、現在に至っております。

町会の主な行事としては、防災・防犯対策、春秋全国交通安全運動、春秋火災予防運動、年末特別警戒、青少年対策等があります。又、災害時の為には、市民消火隊、ミニポンプ隊もあり、毎月一回ポンプ操法訓練に励んでおります。災害発生時に備えて「安方中学校避難所運営協議会」も設置しています。

平成一三年八月三一日～九月一日に行った大田区主催の夜間宿泊防災訓練には、四二〇名の多くの会員が参加し、防災意識を各自が持った事により、それ以降の防災訓練には、毎年多くの会員が参加する様になりました。

各行事や役員・班長会議を通じて、地域の皆さんとの会話を大切にし、子供からお年寄りまで、お互いに声を掛け合える様な街にしたいと思います。

五〇年の歩みを踏まえて、これからも私たち役員一同は、町会の更なる発展を目標に、会員相互の和を基に、明るく住み良い安全な街づくりに努力したいと思います。



事務局からのお知らせ

今回「わがまちの顔」で紹介したリチャード・勝・エレジーノ氏が、十二月の帰国に際し、大田区役所が主催するフライデーコンサートに出演されます。

興味のある方は、是非、フライデーコンサートで、素敵なビオラの調べを鑑賞してみてはどうですか！

フライデーコンサートの開催

日時は、次のとおりです。

場　所　大田区役所一階ロビー

開催日　十二月十七日（金）

時　間　十二時十五分

～四十五分

注　入場は無料ですが、会場が狭いため立見になる場合があります。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，461人
	女	27，197人
	計	56，658人
世帯		29，265世帯

平成16年11月1日現在

編集後記

今回の「わがまちの顔」は、ヴィオラ奏者のリチャード氏を紹介しました。前回、紹介した二胡奏者中西さんに続いて音楽関係の人でした。以前発行した『かまにし17』を読み返してみると蒲田西地区には、芸術に秀でた人が、たくさんいるのだと感心させられました。

特集は、シリーズ「蒲田と文学」その3ということで松本清張の砂の器を取り上げてみました。テレビドラマでも放映されていましたが、これを機会に、もう一度小説や映画を見直してみてはどうですか。以前と感じ方が違ってくるかも？

町会紹介は、安方北町会です。今年創立50周年だったそうです。次回紹介する安方南町会と分かれて発足したそうですが、次回と読み比べてみたら面白いかも？

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五